学位論文要旨および審査要旨

氏 名 武 分 祥 子 (たけぶ さちこ)
学 位 の 種 類 博士 (社会学)
学位授与年月日 2007年3月31日
学位論文の題名 「看護実践分析によるケアマネジメントの実践論の研究」

【論文内容の要旨】

1. 本論文の構成

序論

1. 問題意識と研究方法
2. 本論の目的と構成

第1章 現代の高齢者介護問題とケアマネジメントの課題

第1節 現代の高齢者介護問題を分析する視点

第2節 現代の高齢者介護問題の特徴

- 第1項 健康問題から介護問題へ
- 第2項 家族介護から社会的介護へ
- 第3項 現代の高齢者介護問題の2つの特質

第3節 高度成長以後の高齢者医療・福祉施策の展開—介護問題の特質に应运ってきたのか—

- 第1項 社会保障体制の転換と高齢者介護問題
- 第2項 1970年代から1980年代の医療における高齢者介護
- 第3項 高齢者介護の医療から福祉への移行—医療における「社会的入院」の締め出し—
- 第4項 高齢者介護をめぐる施策と高齢者介護問題解決の基本的課題

第4節 ケアマネジメントの目指すもの

小 括

第2章 日本におけるケアマネジメント論の批判的検討

第1節 日本におけるケアマネジメント

- 第1項 ケアマネジメント概念の生成・発展—アメリカ・イギリスを例に—
- 第2項 日本におけるケアマネジメント移入

第2節 ケアマネジメントの実際

- 第1項 ケアマネジメントの事業実績
- 第2項 ケアマネージャーの就労実態
- 第3項 ケアマネージャーの資格取得と全体数
- 第4項 日本におけるケアマネジメントの問題

第3節 日本におけるケアマネジメント論の検討

- 第1項 三浦文夫の「社会福祉政策論」とその影響
- 第2項 白澤政和のケアマネジメント論
- 第3項 現在のケアマネジメント論
- 第4節 新たなケアマネジメント論の仮說的提起
 - 第1項 社会福祉の三元構造とケアマネジメント
 - 第2項 ケアマネジメント論の仮說的提起
- 小 括
- 第3章 先進的な看護実践の検討—ケアマネジメント実践としての視点から—
 - 第1節 戦後から1970年代の佐久地域の地域医療活動における看護師実践
 - 第1項 地域概要と佐久総合病院の地域医療活動の沿革
 - 第2項 佐久地域における地域医療活動の特徴
 - 第3項 巡回診療における看護師実践の実際
 - 第4項 佐久地域の看護師実践の特徴—ケアマネジメント実践としての視点から—
 - 小 括
 - 第2節 1950年代から1970年代の沢内村の地域保健活動における保健師実践
 - 第1項 地域概要と保健活動の沿革
 - 第2項 沢内村の保健活動の特徴と保健師実践
 - 第3項 保健師実践の実際
 - 第4項 沢内村の保健師実践の特徴—ケアマネジメント実践としての視点から—
 - 小 括
 - 第3節 1970年代の天津市の乳幼児健診における保健師実践
 - 第1項 地域概要と乳幼児健診の沿革
 - 第2項 天津市の乳幼児健診の特徴と保健師実践
 - 第3項 保健師実践の実際
 - 第4項 天津市の保健師実践の特徴—ケアマネジメント実践としての視点から—
 - 小 括
 - 第4節 ケアマネジメントの実践
 - 第1項 事例検討による仮説の検証
 - 第2項 事例検討から導き出されたケアマネジメント実践への提起
- 第4章 ケアマネジメントの実践論
 - 第1節 ケアマネジメント実践の制度的基礎
 - 第1項 現代における高齢者介護要求の特質と課題
 - 第2項 ケアマネジメントの専門性—3つの自由・独立—
 - 第2節 ケアマネジメントの社会福祉制度論
 - 第1項 真田是の三元構造論とケアマネジメントの位置
 - 第2項 三元構造論に即したケアマネジメント実践—ケアマネージャーの役割に基づいて—
 - 第3節 介護保険制度下のケアマネジメント実践における基本的課題の提起

資料（聞き取り調査） 参考文献

（以上の構成で、本文106ページ、資料18ページ、参考文献14ページである）

2. 本論文の要旨

①本論文の目的、方法

介護保険制度の導入によりケアマネジメントが制度化された。本論文は、この高齢者介護におけるケアマネジメントを、要介護者・家族の生活問題解決に向けて、目的意識的計画的組織的に働きかける実践と仮説し、その理論構築をめざす。

研究方法は、第一に、理論構築の前提として現代の高齢者介護問題の本質的特徴を明らかにし、第二に、現在のケアマネジメント制度・施策それによる展開がその本質的特徴に迫るものになっていないとの現状分析から、第三に、その本質的特徴に迫ってきた、過去の、制度的保障をも作り出したケアマネジメントの事例（看護実践）の分析から理論構築の根拠を導き出す、というものである。

したがって本論文は、ケアマネジメント論構築の基本的枠組みの提起となる。また表題の「看護実践」については、筆者の研究動機に「看護の在り方の探求」が記されているが（序論）、結論で明らかにされているように、ケアマネジメント実践は看護実践だけのものではない。本論文はケアマネジメント論の範疇に属する。

②現代の高齢者介護問題の本質的特徴

現代を高度経済成長期以後とし、まず高齢者介護問題の特徴に関する先行研究の方法論を批判的に検討し、現状分析の視角を明確にする。そして次に視角に即した典型的な事象から高齢者介護問題を構造化して本質的特徴を明らかにする。

具体的には、医療における疾病構造の変化、技術革新等による、医療・健康問題から長期の健康問題をも伴う介護問題への展開（第1章第2節第1項「健康問題から介護問題へ」）、それによる介護困難の拡大と核家族化等に伴う、家族内では担いきれない介護問題の生活問題化（第1章第2節第2項「家族介護から社会的介護へ」）、と構造化する。

これらの展開は、この間の施策によってさらに深刻に、そして進展される（第1章第3節）。医療における「社会的入院の締め出し」、介護必要量の増大に伴わない公的財源縮小、等である。

以上によって、ケアマネジメントの生活問題に働きかける実践の必要性が明らかにされる。

第2章では、現行のケアマネジメント制度・施策それによる展開が、こうした本質的特徴に対応していないと現状分析される。ここでも、先行研究の方法論を批判的に検討して視角を明確にし、典型的な事象で検討される。

具体的には、日本のケアマネジメント制度等は、欧米からの移入内容も含めて「相談援助技術中心のマニュアル化による実施」とされる（第2章第1節、第2節）。また同制度の推進論者のケアマネジメント論でも、ケアマネジメントが「社会資源整備不足の範囲内での」「サービスの効率化」の手段・手法とされているとする（第2章第3節）。

したがって「相談援助技術中心」だけではない、「社会政策の技術論」ではない、生活問題から社会福祉政策主体にも働きかける運動も含めた（真田是の社会福祉三元構造論に位置づけられる）ケアマネジメントの実践論が仮説的に提起される（第2章第4節）。

③先進的事例にみるケアマネジメント実践の分析

第3章では、「戦後から1970年代の佐久地域の地域医療活動における看護師実践」「1950年代から1970年代の沢内村の地域保健活動における保健師実践」「1970年代の大津市の乳幼児健診における保健師実践」を事例に分析する。この章が本論文の中心となる。

この3地域の地域医療活動は「住民の健康要求だけではなく福祉要求にも対応し、かつ地域住民の生活に深く関わって住民とともに展開された」地域医療活動としてすでに高い評価を受け、先行研究も多い。しかし先行研究において、第一線で活動した看護師、保健師の実践に焦点をあてた研究は少ない。第3章では、その看護実践にケアマネジメント実践の原型を見出し、当時の看護師、保健師からの事情聴取も含めて看護師、保健師によるケアマネジメントの実践として分析する。

当時の住民がもつ医療・健康問題、福祉問題、介護問題、さらにそれらが生活問題化する過程、生活問題の内容などは現代と異なるものもあるが、生活問題に働きかけるケアマネジメントの実践として教訓を導き出す。

具体的には、1) 実際に触れることによる情報収集と実態の把握、2) 要求の発掘と予防的介入、3) 住民の要求を高めるための専門性の発揮、4) 生活の系統的・総合的支援、5) 生活改善の組織化、を共通項にあげる。

看護師、保健師の、当時における具体的でリアルな活動内容を、生活問題に立ち入りそこに働きかける実践過程として整理し、次章のケアマネジメント実践の理論的根拠とする。

④ケアマネジメントに関する理論構築への提起

以上の検討から第4章では、ケアマネジメント実践の理論化をする。

理論構築の前提には、ケアマネジメントの実践が「生活問題に働きかける」ということを置く（第4章第1節第1項）。したがってケアマネジメントの実践の特徴として1) 幅広い視点から問題を発見する、2) 総合的な生活問題に働きかける、3) 要介護者・家族がその問題を理解できるように支援する、4) 要介護者・家族が問題解決の主人公となるように組織化を支援する、という5点をあげる。

その特徴から、ケアマネジメントの制度的基礎（専門性の位置づけ）、実践の構造（前記真田是等の三元構造をもとに）を理論化の基本的枠組みとして提起する。

専門性に関しては、次の3点がある（第4章第1節第2項）。

第一は、生活問題そのものに立ち入るための「既存専門領域からの自由と独立」。ここでは問題発見能力としての既存専門領域での専門性だけではなく、総合的な、すなわち既存領域とは異なる領域に立ち入る既存専門領域からの自由と独立がある。さらに生活問題に立ち入ることを基本にしたものであり、「対人援助の労働における共通の目標の優位性」「要求を引き出すコミュニケーション労働の視点」が既存専門領域の専門性に加わる。

第二に、利用者の健康問題意識、介護問題意識、生活問題意識に働きかけるための「専門的知識からの自由と独立」。ケアマネジメントは、要介護者・家族の日常生活様式・感覚による行為、そこに込められた内面的要求に立ち入って問題を理解してもらい働きかける。したがって日常の意識・行為に沿うように専門知識を創造発展させていく、保有する専門知識からの自由と独立である。

第三に、要介護者・家族も含めた住民が社会的に問題を解決していくことに立ち入るための「社会資源、社会資源整備責任からの自由と独立」。ここでは、「生命を守ることを第一義とする」実践から導き出される行政の社会資源整備責任からの自由と独立だけではなく、営利活動、採算性からの自由と独立もある。後者は、総合的な生活問題の解決を支援することに対する、特定のあるいは制度の範囲内でサービス

を提供する事業からの自由と独立という面もある。

実践の構造化（第4章第2節）については、対象の生活問題に働きかけ、主人公になって運動し政策主体に働きかけることを支援する実践であり、要介護者・家族を中心に、真田是等の社会福祉三元構造論の3要件、生活問題、運動、政策主体に常に作用していくものとされる。そして「生活問題が運動となる過程」「運動によって制度化が実現する過程」「制度によって生活問題が対象化する過程」という過程に即して、それらと要介護者・家族を媒介するケアマネジメントの実践内容があると、構造の試案を提起する。

最後に以上の基本的枠組みから、現行ケアマネジメント制度に要請される基本的な見直し課題を提起する（第4章第3節）。

【論文審査の結果要旨】

本論文は、以下の点で学術上優れた成果として評価される。

全体として、ケアマネジメントについては、相談援助技術として深められてきているが、福祉制度論、社会福祉理論での位置などの理論研究はまだほとんどされていない。本論文はその先駆けであり、独創的な提起は今後の理論研究の可能性を切り開いたと言える。

- (1)「生活問題に立ち入りそこに働きかける」という社会福祉の一般的命題を、本論文は、ケアマネジメントの固有な主たる領域として確立する方向を提起する。生活問題の解決は社会福祉の諸要件、諸要素で総合的に担われるであろうが、「働きかける」過程の固有性に着目し、その固有領域を提示した、と言える。これはケアマネジメント論の確立だけではなく、社会福祉の諸要件、諸要素の機能論あるいは機能連携論の今後の研究に重要な示唆を提起している。
- (2)「生活問題に立ち入りそこに働きかける」という社会福祉従事者の実践の命題を、従事者の制度論としても確立していく基本的枠組みを提起した、と言える。

この点は実践論あるいは社会福祉労働論として深められてきているが、専門性による制度論の構築は今後の課題であった。本論文が示した「3つの専門性による自由と独立」という独創的提起は、制度論として確立していく基本的枠組みを明らかにしている、と言える。

さらに「利用者本位」という実践の命題を、利用者以外の「3つの専門性による自由と独立」という独創的提起で、従事者の制度論として担保する基本的枠組みをも提起している、と言える。

ただし本論文は今後さらに深めなければならない課題もある。

- ・本論文において検討対象とされた先行研究は、主に視角を明確にするためのものとなっている。本論文は独創的な視角を提起しているが、それだけではなく、諸先行研究、施策動向に対しても対置的提起もしている。それらのさらなる厳密な批判的検討で論を確立していくことが要請される。
- ・本論文は、制度的保障をも作り出した過去の事例から理論的根拠を導き出す、という優れた発想で展開されている。しかしそれだけでは、制度化されたケアマネジメントの現代への理論としては十分ではない。評者が「理論構築の基本的枠組みを提起した」とする由縁である。過去の事例を現代につなぐ歴史的経緯あるいは現状を変革する動きへの関係性など、現代性と過去をつなぐ論理的展開の深めがさらに要請される。なおこの点から、きわめて現代的な三元構造論によるケアマネジメントの実践構造に関する提起（第4章第2節第2項）は試案と受け止めた。

なお本論文は、現場で奮闘しているケアマネジメント従事者・関係者に、ケアマネジメントは「生活問題に立ち入りそこに働きかける実践」と定置し、大きな励ましと展望を開いたと言える。ケアマネー

ジャーの活動の発展方向，専門性による身分保障方向，現行制度の改革方向に理論化の基本的枠組みを提起することで指針を示した。

【試験または学力確認の結果の要旨】

2007年2月8日(木)13:00-14:30, 産業社会学部共同研究室において公聴会を開催し, 審査委員会は, 本論文の内容に関して学位申請者武分祥子に対して口頭試問を行った。申請者による論文要旨の説明のあと, 各審査委員と申請者との質疑応答, そして主査による講評が行われた。各審査委員の質問に対する申請者の回答は適切にされた。

全体的には, 過去の看護実践をケアマネジメント実践ととらえ, ケアマネジメントの実践論を生活問題に働きかけるという課題から, 社会的問題への対応も含めた専門的領域として確立していく, という本論文の方向性提起が高く評価された。

他方, それとともに, 看護実践をしてきた, あるいは今後看護教育に携わって研究をしていく申請者への, 看護という専門領域にこだわった研究への期待も出された。具体的には, 過去の実践も看護実践で蓄積されてきたという事実に着目して, たとえば看護実践の公衆衛生的検討, 看護の専門領域が生活問題に入り込むために必要な看護の専門内容の検討, ケアマネジメント実践における看護領域の基礎的素養内容の検討, などの検討課題の指摘である。

ケアの問題を生活問題という視点から社会問題化して研究していく方法とともに, 看護という専門領域を深化させて, ケア, 生活問題に入っていく方法の検討も要請されている。本論文の研究方法は前者によっているが, 後者も含めてすすめることで, 両者の関係性が明らかにされよう。本論文がケアマネジメント実践の構造化において採用した三元構造についても, 職員論を中心に深めていく重要な課題になろう。申請者の今後の研究課題として確認された。

なお先行研究については, とくに諸外国も含めたケアマネジメント論の精査が指摘された。日本への移入内容の評価に関わる部分もあり, 重要な課題提起となった。

また本論文では必要な外国語の論文・著書・資料等を読み解き, そこで得られた内容を考察し引用もされている。

以上, 論文審査と公聴会での口頭試問を踏まえ, 審査委員会は, 全員一致して, 本論文が学位を授与するに十分に値する水準に達していると認め, 本学学位規程第18条第1項に基づき, 課程博士の学位を授与することが適当であると判断する。

審査委員 (主査) 峰島 厚 立命館大学産業社会学部教授
(副査) 小川 栄二 立命館大学産業社会学部教授
(副査) 加藤 直樹 立命館大学名誉教授